プロローグ ―――― 福永真弓＋「高校生のための社会学」編集委員会　i

I　個人化する社会

選べる私／選べない私　生きることの意味と社会 ―――― 奥村　隆　**2**
1　生きることの意味？…… 2
2　ふたつの「自殺論」 …… 3
3　再帰性とそのゆくえ…… 7
4　15年後の現在 …… 11

「傷つきやすさ」と時代の閉塞感 ―――― 吉澤夏子　**13**
1　大人でもない、子どもでもない…… 13
2　傷つけず／傷つかない関係…… 15
3　飛び立つことと止まることの間に…… 17

差別の日常　カテゴリー化実践の問題性 ―――― 桜井　厚　**23**
1　コミュニケーションにおけるカテゴリー…… 23
2　認知枠組みとしてのカテゴリー…… 24
3　差別－被差別の文脈…… 26
4　傍観者の共犯関係…… 29
5　カテゴリー化の呪縛…… 31

他者の人生　ライフコース研究への誘い ―――― 木下康仁　**34**
1　物語の始まり…… 34
2　ライフチャンスとその帰結　若者たちの31年間 …… 35
3　個人の人生と社会の変化が織り成す世界…… 41

日本人は無宗教なのか？　宗教社会学の立場から ―――― 小池　靖　**45**
1　近代社会は、非宗教化した？ …… 45
2　近代化には、宗教の影響もあった？ …… 46
3　宗教社会学が扱う対象 …… 48
4　創唱宗教と自然宗教 …… 49
5　宗教の社会的な特質とは …… 50
6　迷信・占い・疑似科学 …… 52
7　宗教の可能性、宗教を社会学する可能性 …… 53

「昭和30年代ブーム」から「家族」を読み解く ―――― 岩間暁子　**55**
1　『ALWAYS－三丁目の夕日』の世界 …… 55
2　ダイニングキッチンの誕生と「団地族」 …… 56
3　「近代家族」の大衆化 …… 58
4　近代家族の大衆化を支えた高度経済成長期 …… 59
5　「個人化」する社会における「家族」の意味 …… 60

II　ネットワーク化する社会

ネットワークとしての都市 ―――― 松本　康　**66**
ゆるやかで多様なネットワークが、都市の活力を生みだす
1　都会人は孤独で無関心か？ …… 66
2　社会的ネットワーク　人と人とのつながり …… 67
3　都市とは？ …… 70
4　都市と社会的ネットワーク …… 71

地域活動はなぜおもしろいか ―――― 江上　渉　**75**
1　地域社会なんて関係ない？ …… 75
2　けやきコミセンのこと …… 76
2　ひとりひとりが輝く仕組み …… 77
4　何が楽しいのか …… 78
5　若者たちの声 …… 80
6　オルタナティブな生き方としてのコミュニティ …… 84

つながり、かかわる環境運動 ―――― 関　礼子　**86**
1　「セイレンの歌」を聞いたか？ …… 86
2　自然とかかわり、社会とかかわる …… 86
3　開発という「痛み」 …… 89
4　日常としての自然、非日常としての自然 …… 91
5　自然はガラス細工のようにはかないか？ …… 94

NPOことはじめ ―――― 萩原なつ子　**96**
1　NPOの基礎知識 …… 96
2　組織としてのNPO …… 99
3　NPOの社会的役割 …… 100
4　特定非営利活動促進法(NPO法)って何？ …… 102
5　NPOを理解する３つの早道 …… 104

環境正義というまなざし ―――― 福永真弓　**106**
1　エリン・ブロコビッチの鮮やかな笑みから …… 106
2　社会に存在するさまざまな格差と環境リスク …… 108
3　社会正義という概念の必要性　仮面ライダーすら見向きしなくても …… 110
4　環境リスクの偏在という現実から環境正義へ …… 111
5　環境正義からグローバルジャスティスへ …… 114

Ⅲ　流動化する社会

雇用の流動化と若者の「やりたいこと」へのこだわり ―――― 李　旼珍　**118**
1　雇用の流動化の現実 …… 118
2　若者の「やりたいこと」へこだわり …… 123

少子化・高齢化は、社会をどう変えるか？ ―――― 野呂芳明　**127**
1　「高齢化」と「少子化」 …… 127
2　人口減少期に入った日本。では世界は？ …… 131
3　少子高齢化の社会学的考察 …… 133
3　少子高齢化の問題 …… 136

教育と社会の関係を考える　「学歴社会」という認識を手がかりに　――香川めい　**138**
1　学歴社会は諸悪の根源？……138
2　学歴と社会のつながりを説明する……140
3　「望ましい」社会的選抜の基準は存在するのか　……144

消費は世界を変える！――間々田孝夫　**148**
1　消費は孤独な行為か？……148
2　自己表現／他者理解としての消費……150
3　加害／救済としての消費……153

流動化の中の不平等と社会階層研究――村瀬洋一　**157**
1　社会階層と社会の変化……157
2　社会階層と不平等研究……161
3　再分配政策と今後の格差……167

近代における国家権力と全体主義――本田量久　**171**
1　社会学と国家権力……171
2　近代民主主義の理念とその限界……171
3　近代における国家権力　国家の正統性と合法的支配　……172
4　官僚制と思考停止　「鉄の檻」……173
5　アイヒマンたち　組織人間と国家的犯罪……174
6　非理性的な群衆心理と全体主義国家の誕生……175
7　ナチズム以降の全体主義　アメリカの反共体制　……177
8　全体主義は過去の遺物か　今日のアメリカと「対テロ戦争」　……177
9　民主主義と全体主義の間……179

ヴァーチャル・コミュニティへの期待と現実――成田康昭　**181**
1　孤独の闇に開いた窓……181
2　インターネットの文化……182
3　マスメディアの欠陥とインターネットのリスク……184
4　ヴァーチャル・コミュニティとしての学校裏サイト……186
5　ヴァーチャル・コミュニティが抱える問題……189

Ⅳ　メディア化する社会

変貌するマスメディア ―― 砂川浩慶　**192**
1　メディアは正解のない世界…… 192
2　メディアとは何か…… 192
3　メディアの歴史…… 193
4　日本のマスメディアの現状…… 195
5　これからのメディア…… 199

デジタル情報環境と情報民主主義社会 ―― 服部孝章　**201**
私たちはデジタル・デモクラシーの主権者だ
1　はじめに…… 201
2　メディアの変遷、メディア接触の変化…… 202
3　急速に進化するデジタル化…… 204
4　コミュニケーション形態の変化と記憶の外脳化…… 205
5　軍事社会・産業社会・情報社会…… 206
6　おわりに　かつて、わが母はVチップであった …… 209

ジャーナリズム、迫られる再確立 ―― 木下和寛　**212**
1　ネットでのマスコミ批判…… 212
2　ジャーナリズムの要件…… 213
3　ジャーナリズムの役割…… 214
4　現代ジャーナリズムの課題…… 217
5　迫られるジャーナリズムの再確立…… 219

テレビのつくる同時体験 ―― 井川充雄　**221**
1　アポロの記憶…… 221
2　テレビが作る同時体験…… 222
3　これからのテレビ視聴…… 228

ニュース分析　近年の「中国報道」を事例として ―― 黄　盛彬　**230**
1　ニュースとは何か…… 230
2　10年ぶりの日中首脳会談　ギョーザとチベット、そしてガス田 …… 230

3　四川大地震発生、ニュースの主人公はいつの間にか、日本救助隊…… 231
4　日本救助隊の「成果」とは？…… 237
5　「自衛隊機派遣」エピソード　その羅生門的世界の真実は？…… 238
6　ニュースはいかに作られるのか…… 240

メディア化する政治と「ポピュリズム」の進化 ―――― 逢坂　巌　243
1　戦略としてのポピュリズム…… 243
2　「ポピュリズム」の開始 …… 243
3　「ポピュリズム」の「内向」 …… 245
4　「ポピュリズム」再浮上 …… 247
5　無党派の可視化と「ポピュリズム」の進展 …… 250
6　「ポピュリズム」の変容と政治の変化 …… 252

民主化とメディア ―――― 清水　真　255
1　メディアの時代　1980年代と情報のグローバル化 …… 255
2　社会主義国の民主化とメディア…… 256
3　社会主義国ではメディアはどのようなものとされているか…… 256
4　社会主義国のメディア統制は一枚岩だったか？ …… 258
5　東欧の人々は弱い存在か…… 259
6　国境を越えて流れこむ情報…… 259
7　地下出版と短波ラジオの結びつき…… 260
8　体制転換後にはどのようなメディア状況が生まれたか…… 261
9　テレビは誰のものか…… 262
10　社会主義の経験が残したもの…… 263

EUの放送メディア法制の展開と課題 ―――― 村瀬眞文　264
1　テレビメディアの発達とEU …… 264
2　テレビからオーディオビジュアル・メディアへ…… 265
3　EUの「電気通信法制」と「エレクトロニック・コミュニケーション法制」…… 269
4　EUの放送メディア法制と各国の課題 …… 271

V　グローバル化する社会

「グローバリゼーション」とは何か？ ―――― 高橋利枝　**274**

1　グローバリゼーションは欧米化？ …… 274
2　「グローバル」「インターナショナル」「トランスナショナル」の違いは？ …… 275
3　日本におけるコスモポリタニズムの可能性 …… 277
4　グローバリゼーションの行方は誰の手に？ …… 279

メルティング・ポットからトランスナショナル・コミュニティへ ―― 水上徹男　**284**

国際的な人の移動と同化理論の推移

1　メルティング・ポットに溶け込む移民 …… 284
2　文化的一元論としての同化 …… 285
3　社会的な受容と内面的な変化 …… 287
4　日系アメリカ人の同化 …… 288
5　移民を受け容れた社会の変化 …… 290
6　分節的同化 …… 292
7　国際的な移動の活発化とトランスナショナル・マイグラント …… 293

国境を超える市民活動 ―――― 伊藤道雄　**297**

はじめに …… 297
1　なぜ市民は国境を超えて支援・協力活動するの？ …… 297
2　日本ではどのような人たちが国境を超えて、どのような活動しているの？ …… 300
3　市民組織が国境を超えて活動する意義とは？　今後の行方は？ …… 306
おわりに …… 308

〈フィールド〉の歩きかた ―――― 阿部珠理　**310**

文化・フィールドワーク・エスノグラフィー

1　「文化」を考えるときの視点 …… 310
2　文化のものさし　イデオロギーとしての進化論 …… 311
3　フィールドワークという方法 …… 313
4　先住民研究の〈現場〉 …… 316

VI　進化する社会調査

地図で社会学する ―――― 高木恒一　322
1　地図で社会学？ …… 322
2　社会学が用いる地図 …… 322
3　社会地図を読む(1)　パターンの認識 …… 324
4　社会地図を読む(2)　地図を重ねる …… 325
5　社会地図を読む(3)　鳥の眼と虫の眼の接合 …… 326
6　社会地図を描く …… 327
7　地図を描くときに考えるべきこと …… 328
8　社会地図の可能性 …… 330

インタビュー調査からインターネット利用形態を描く ―――― 田辺　龍　332
1　インターネットで「ニュース」を見ること …… 332
2　「個人化」するニュース受容 …… 333
3　新聞への接触の有無は情報行動全体に影響を与えているのか？ …… 337
グループインタビューによる比較研究
4　変容する「知」の枠組み　まとめにかえて …… 341

ドキュメント分析　記録資料のリアリティとの関係 ―――― 水原俊博　343
1　社会調査としてのドキュメント分析 …… 343
2　ドキュメント分析と現実(リアリティ) …… 345
3　ドキュメント分析の妥当性 …… 351

画像を見ることをめぐって　エスノメソドロジーという方法 ―――― 是永　論　353
1　「虐殺」か？　「調査」か？ …… 353
2　「キャラ」として見ること …… 354
3　「ありきたり」を見るために　エスノメソドロジーという方法 …… 360

社会調査活用の基本的な問題点　社会調査の見直し ―――― 横濱征四　363
1　社会調査について …… 363
2　社会調査を活用する目的 …… 363
3　社会調査の具体的な活用 …… 364

4　社会調査の手続き…… 365
5　調査方法別の主だった特徴…… 367
6　標本抽出と調査方法の特徴…… 368
7　社会調査を巡る問題点…… 368

エピローグ ――――――――――「高校生のための社会学」編集委員会 **371**

索　引 ―――――――――――――――――――――――――――― **372**

コラム目次

本書の読み方 …… xvi
マックス・ウェーバー　社会学の源流 ……22
専門用語 ……54
ロバート・エズラ・パーク　社会学にフィールドワークを持ち込んだ男 ……64
アンソニー・ギデンズ　モダニティの帰結を見据える …… 115
ゲマインシャフト／ゲゼルシャフト (Gemeinshaft/Gesellshaft) …… 116
カール・マルクス …… 211
デュルケムと社会秩序　多様性と統合性の両立可能性 …… 272
社会調査という「選択」 …… 342

本書の読み方

本書は「高校生のための社会学」というタイトルであるが、高校生だけでなく社会学を専攻している学生、さらに社会人一般まで幅広い層を対象に想定して企画された。これから社会学を学ぼうとしている高校生、社会学的世界を知りたい大学生、以前に受講したことがあるが社会学はよくわからないと思っている方、そのほか社会学に興味はあるが取り付きにくいと考えている方にとって、社会学の見方や扱う領域などが理解できれば、編集委員会の構想が活かされたと言えよう。本書は、「社会学原論」のテキスト作成を趣旨としたわけではない。テキストとして広い領域を網羅したり、専門用語の定義などを提示するスタイルとは異なる。しかし、社会学の副読本として使用することは可能であろう。社会学は客観性の保持を念頭に置きながら、グローバルな社会というマクロに展開する事象から、当事者の思いや葛藤あるいは思想や感性を含めた個人の内面というミクロな領域にいたるまで、人と社会を対象とした研究の成果を蓄積してきた。理論や概念の説明に終始すると実感しにくくなる世界を、本書は個別のテーマ設定によってあらわした。したがって、興味のある章を選んで読み進めることができる。

執筆者が平易な表現を心掛けた点で、本書は通常の専門論文と異なる。しかし書誌情報にかんしては、専門誌などで一般的に用いられる形式を適用した。例をあげると、以下のようになる。本文のなかで（Fujita and O'Brien 1991: 118-119）など、() を使用した表現が登場する。これはFujitaとO'Brienという２人の共著による1991年の刊行物で、118ページから119ページに記載された箇所を引用したという意味である。このように本文で引用が明記された文献は、その章の末尾、「参考文献」で次のように提示した。Fugita, Stephen S. and David J. O'Brien. (1991) *Japanese American Ethnicity: The Persistence of Community.* Seattle: University of Washington Press. 著者.（発行年）*書名*. 発行所の順序で記される。欧文の書籍名は*イタリック体*であらわすが、日本語の書籍は『』内にそのタイトルが入る。外国語の書籍で翻訳書がある場合には、(=訳者 発行年『訳本名』発行所）が追記される。ジャーナルの場合もほぼ同じであり、著者（発行年）の後に「論文タイトル」『ジャーナル名』巻（号）と続き、最後に当該論文が掲載されたページ数を入れる、という規則に準拠した。たとえば、次のようになる。宮本みち子 (2006)「雇用流動化のなかの若者実態――社会科学の立場から」『精神科治療学』21 (11): 1199-1205. ジャーナルや書籍によって若干書き方の相違はあるが、基本的に文献情報はこのような書式となる。より詳しいことを知りたい方は、学会誌などの執筆要項をご覧いただきたい。

プロローグでは架空の人物の生活を描き、日常生活の具体的な場面やそのときの心情が、どのテーマとかかわるかについて提示することを試みた。読者の関心や興味と社会学のアプローチによる現代社会の見方とのつながりがわかるように、このようなスタイルを採択した。「個人化、ネットワーク化、流動化、メディア化、グローバル化」の５つと「社会調査」による６つの項目をテーマ化したが、５つの項目はそれぞれ排他的に独立しているわけではなく、現代社会において各項目が相互に連関している。実際に社会を分析する手法のいくつかは、６つ目の「進化する調査」で取り上げた。解説を要する人物、用語や用法については、コラムを挿入した。読者にとって、本書が社会学的世界探求への糸口となることを願っている。

水上徹男